

階層フォルダモデルによる「は」主題の機能分析*

浅山 佳郎

【キーワード】 主題 談話単位 階層構造 「は」

1. はじめに

本稿は、助詞「は」の機能を論じる。ここでは議論をとおして、「は」が文をその内部に収納する一種の「フォルダ」を形成し、それによって談話単位をつくっていること、およびその「フォルダ」が構造をなし、それによって文章全体の情報を管理していること、の2点を中心にあきらかにしていく。

主題のもつこうした談話上の機能については、はやく Tsao (1979) が中国語の主題について指摘する¹⁾。そこではさらに、主題となりうる名詞句の特性の問題、および主語と主題の問題が議論されており、日本語の同類の問題をかんがえるうえで参考になる。

また、日本語における主題の談話上の機能にかんする議論としては、最近のものに龍城 (2000) がある。龍城は、プラグ言語学派とハリデー理論のテーマ・レマ概念を比較したうえで、日本語におけるテーマ・レマ分析として、英語のような「節」を基本的単位とするものではなく、いくつかの「節」をふくむ「伝達的ユニット」を基本として、その複数の形態にかぶさる「スープラテーマ」を設定することを主張する。この龍城の「スープラテーマ」は、本稿の主題による談話単位とかさなるものである。

しかし、これらの研究においては、主題が形成する談話単位自体の特性と構造について集中的に議論がなされているとはいえない。本稿は、

Tsao や龍城でしめされる主題の機能にかんする観点を共有しつつ、さらに主題のつくる談話単位の構造を具体的に論ずることを目的とする。

2. 基本的な概念

「は」は、主題をしめす。ただし本稿でいう「主題」は、文の主題ではなく、文をこえて機能するものである。本稿では、主題の機能を以下のようにかんがえる。

(1) 主題は談話上の単位を形成し、1つの談話単位は1つの主題をもつ。

談話は、いくつかの文によって形成されるが、1つ1つの文が均質にならぶものではなく、いくつかの文がまとまって単位をつくる。この談話上の単位の認定にはさまざまなレベルと基準がありうるが、ここで主題を基準にすると、いくつかの文にまたがって機能する「は」主題名詞句は、それらいくつかの文に結束性をあたえて談話単位をつくるとみなすことができる²⁾。その意味で、本稿であつかう談話単位は、いわば「主題単位」とよべるものである。この談話単位は、主題を1つだけもっており、それはその単位をつくる最初の文の冒頭位置にある名詞句に「は」があたえられることで成立する。以下に例をみる。

(2) この本は、言語学の入門書である。20年以上もまえに出版されたが、いまでもおおくの大学で教科書としてつかわれている。

この文章では、最初に「この本」という名詞句に「は」があたえられている。この「は」でマークされた主題は、以下にみるように、1つの文にとどまるものではなく、複数の文にはたらいっている³⁾。

(3) この本は、言語学の入門書である。
 (この本は、) 20年以上もまえに出版された
 (この本は、) いまでもおおくの大学で教科書としてつかわれている。

つまり、第1文の「言語学の入門書である」と第2文の「20年以上も

まえに出版された」と第3文の「いまでもおおくの大学で教科書としてつかわれている」の3つの文にたいして、「この本は」が共通の主題としてはたらいっている。これは、3つの文すべてが、主題「この本」にかんする記述としてまとめあげられていること、すなわち結束性があたえられてひとまとまりの単位をつくっていることを意味する。これが主題による結束性であり、本稿ではそれを「主題単位」という談話上の単位形成とみなす。

ところで、主題がこのように談話上の単位を形成して文に結束性をあたえるのは、文章を情報として処理しやすくするためであると本稿ではかんがえる。ここではそうした結束性、つまり「主題単位」の形成を、主題による情報処理用の「フォルダ」形成とみなす。

- (4) 主題による談話単位は、主題を「表題」とするフォルダを形成し、その内部に主題単位に所属する文を収納する。

ある「主題単位」の冒頭におかれて「は」でマークされた主題が、フォルダの「表題」となり、その主題に後続する文、つまり「主題単位」内の文が、当該フォルダにおさめられる。このフォルダをここでは「主題フォルダ」とよぶ。文章はそうした「主題フォルダ」の連鎖でなっており、それぞれの主題フォルダの「表題」である主題をとりだせば、「フォルダ表題」の連鎖となる。この連鎖は有意味に関連のあるつらなりである。ここでは「フォルダ表題」としての主題の連鎖を「主題列」とよぶ。

3. 主題による談話単位構成の例

前項でしめした定義にしたがって、具体的な文章をみる。ここでは、比較的理想的な主題列を形成しているものを取りあげる。以下の文章である。

- (5) ガリレオは、アメリカの木星探査機。89年10月に打ち上げられ、5年9か月後の95年7月、探測機を切り離し、木星大気の直接観測に向かわせた。探測機は、直径1.2メートル、高さ86センチの円錐形。同年12月7日に木星大気に突入、約1時間15分の間、大気の成分、

密度などの測定を行い、得られたデータをガリレオ本体経由で送信した。ガリレオは、木星までの飛行の途中でも、さまざまな成果をあげている。(小学館『データパル』(一部改))

この文章を以下の(6)の表のように整理する。まず複文を形成する従属節もふくめて単文にきりわけ、これを表の「文」の欄におく。つぎに、「は」でマークされた文頭名詞句を主題として、表の「主題」の欄におく。この主題欄は、すべての単文ごとにもうけ、いちど「は」でとりたてられた主題が、その後も、各単文の主題となっているかどうかを判断し、もし当該の文に直接の「は」でマークされた名詞句がなくとも、まえの文の主題がそのまま当該の文でも主題としてはたらいっている場合は、そのまえの主題が機能しているとみなし、「=」の記号でしめす。さらに、それぞれの単文に番号をあたえる。このとき、談話単位をしめすために、同一主題にまとめられる文の番号は、十のけたに同一の数値をあたえる。つまり、最初の文の番号は「11」からはじまり、この文と同じ主題をもつ文には、順次「12・13……」の番号があたえられ、つぎに主題が変わったところで、その主題を文頭にもつ単文に「21」の番号があたえられ、つづいてやはり順に「22・23……」という番号があたえられるという具合である。

(6)

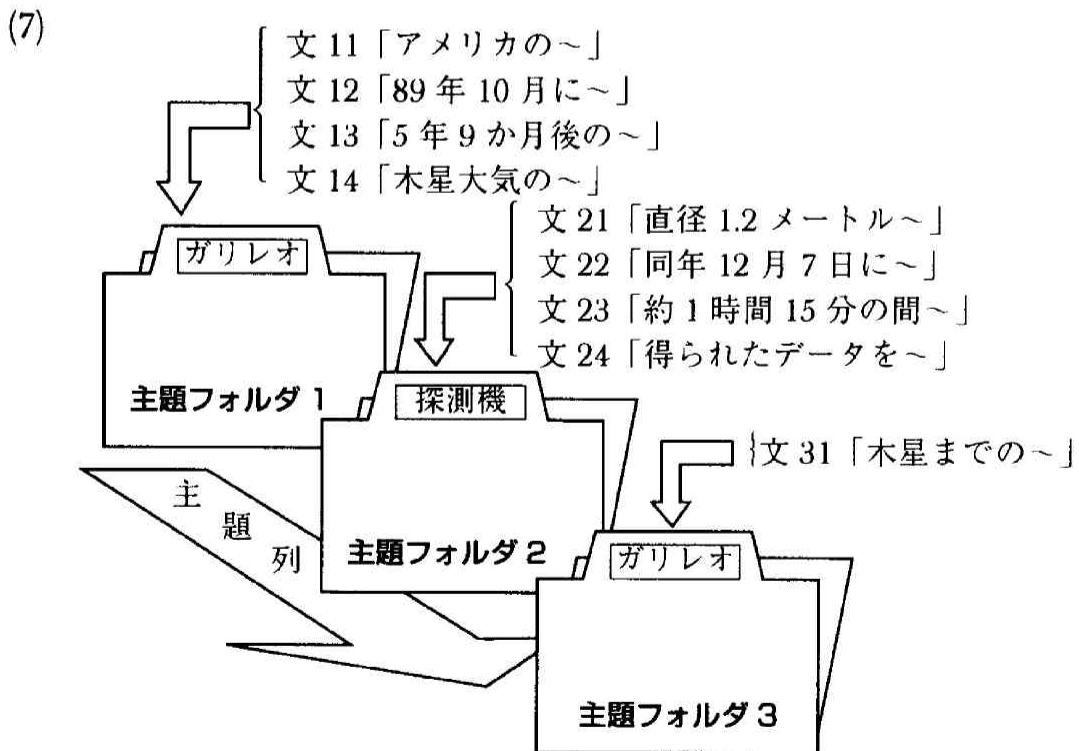
No	主題	文
11	ガリレオは、	アメリカの木星探査機。
12	=	89年10月に打ち上げられ、
13	=	5年9か月後の95年7月、探査機を切り離し、
14	=	木星大気の直接観測に向かわせた。
21	探査機は、	直径1.2メートル、高さ86センチの円錐形。
22	=	同年12月7日に木星大気に突入、
23	=	約1時間15分の間、大気の成分、密度などの測定を行い、
24	=	得られたデータをガリレオ本体経由で送信した。
31	ガリレオは、	木星までの飛行の途中でも、さまざまな成果をあげている。

この文章では、最初に、「ガリレオ」が「は」でマークされて主題となる。これによって「主題フォルダ 1」が形成される。この主題フォルダのもとに、「アメリカの～」という「文 11」と「89 年 10 月に～」という「文 12」と「5 年 9 か月後の～」という「文 13」および「木星大気の～」という「文 14」の 4 つの文がおかれる。つまり「ガリレオは」という主題は、それら 4 つの文をひとまとまりとして 1 つの単位をつくり、自分自身を「表題」とするフォルダにそれらの文をおさめているとみなす。

つぎに別の名詞句である「探測機」が「は」でマークされて、あらたなフォルダをつくる。「主題フォルダ 2」である。このフォルダにも、「文 21」から「文 24」までの 4 つの文がおさめられる。2 つめの主題単位であり、その表題が「探測機」という「主題」である。

さらに別の主題が「は」でマークされる。「主題フォルダ 1」と同じ「ガリレオ」であるが、これを「主題フォルダ 3」とする。この主題のもとにのべられている文は 1 つ、「文 31」の「木星までの～」だけである。

こうしたフォルダ形成と文の収納という主題の機能を図示すると、以下のようなになる。



4. 「主題フォルダ」の順列構造

以上みてきたように、「は」でマークされる主題は、複数の文に結束性をあたえてフォルダを形成することで、文章に、文をこえたレベルの談話単位をつくる。これによって話者と聴者の双方が文章の情報を処理することになる。われわれが文章を発話し、またそれを理解するということは、こうした整理によって情報としての文処理をおこなっていることであり、わかりやすく発話したり的確に理解したりするということは、この主題フォルダをきちんと処理することであるとみなしうる⁴⁾。

こうした主題フォルダの連鎖は、まず順列的な構造として存在する。前項で例とした「ガリレオ—探測機—ガリレオ」も、当面は順列的な主題列とみなすことが可能である。すなわち、この一段の文章は、「ガリレオ」についてのあるまとまった情報と、「探測機」についてのあるまとまった情報と、「ガリレオ」についての補足的な情報として整理されることになる。

こうした線的な順列の構造をもつ主題列と主題フォルダのはたらきかたを、本稿では以下のようにかんがえる。

- (8) ある主題が提示されると、その主題フォルダがひらいてアクティブになり、ワーキングフォルダとなる。その主題に後続して、かつその主題のもとにあると認定される文は、当該の主題フォルダに収納される。あたらしい主題が提示されると、それに対応したあたらしい主題フォルダがひらいてアクティブになり、それまでひらいていた主題フォルダはとじられる。新主題に後続し、かつそのもとにあると認定される文は、この新主題フォルダに収納される。

これは、ある一時に機能しうる主題フォルダがつねに 1 つであることを意味する。もしそうでなければ、複数のフォルダのうちどれにあたらしい文を収納するか、つねに判断しなければならなくなり、情報の処理のための主題フォルダの形成という意味がなくなるからである。しかしこのことは同時に、つねに文をどれかの主題フォルダに整理し続けることを意味することにもなる。しかしそれでは、主題をもたない文が処理できない。よって、そうした問題を回避するために、以下の定義が必要になる。

- (9) 主題フォルダとは別に、アクティブなフォルダがつねに 1 つはたらいっている。主題のない文を収納するための「空主題フォルダ」である。これはアクティブな主題フォルダとは別のワーキングフォルダとして、つねにひらかれている。

この「空主題フォルダ」は、談話が進行しているあいだずっとひらかれており、主題をもたない文、つまりどれかの主題フォルダに収納できない文がおかれる。この「空主題フォルダ」は、そこから主題をとりだす源泉としてのやくわりをもつ。たとえば、以下の (10) の新聞記事は、(11) のような主題列と主題フォルダをつくっているが、最初の 3 文は主題がなく、本稿でいう「空主題フォルダ」に入る。そして、「空主題フォルダ」内の「文 11」の「総会屋」と「文 12」の「発行元」から、「文 21」の「右翼団体」および「文 31」の「情報誌発行元」という主題がとりだされている。

- (10) 大手企業が購読料名目で金銭を総会屋に提供していた。証券会社の不祥事から「情報誌切り」が本格化したが、購読を打ち切られた発行元の一部から反発する声も出ている。右翼団体は「言論・出版・結社の自由を守る会」を結成。警視庁に公開質問書を提出した。情報誌発行元は「打ち切りの風潮だからと断られる」と嘆き、コンサルタント業への転換も模索している。警視庁は業界団体ごとに打ち切りの要請を行っており、絶縁宣言は 270 社に広がっている。(毎日新聞記事 (一部改))

(11)

No	主題	文
11	φ	大手企業が購読料名目で金銭を総会屋に提供していた。
12	φ	証券会社の不祥事から「情報誌切り」が本格化したが、
13	φ	購読を打ち切られた発行元の一部から反発する声も出ている。
21	右翼団体は	「言論・出版・結社の自由を守る会」を結成。
22	=	警視庁に公開質問書を提出した。
31	情報誌発行元は	「打ち切りの風潮だからと断られる」と嘆き、
32	=	コンサルタント業への転換も模索している。
41	警視庁は	業界団体ごとに打ち切りの要請を行っており、
51	絶縁宣言は	270 社に広がっている。

5. 「主題フォルダ」の階層構造

前項でみた主題フォルダの構造は、順列的に主題列を形成しているものとみなして議論したものであるが、実際の主題列はさらに複雑である。そうした複雑さを整理するための基本的なかんがえかたとして、本稿は以下のような「階層構造」を主張する。

- (12) ある主題フォルダの内部に別の「子フォルダ」をひらくことが可能であり、こうした「親-子フォルダ」によって、主題フォルダは階層構造をもつ。

「親-子フォルダ」の階層構造をみるために、まず例となる文章をしめす。以下の (13) であり、それを主題フォルダによって整理したのが (14) である。

- (13) ガラスは、かたく、もろく、透明な物質で、通常、珪砂や石灰などを混ぜて高温で溶かし、急冷して製したもの。色ガラスは、金属の酸化物を混ぜて製する。酸化コバルト、酸化マンガン、酸化第一第二銅などを用いる。食器、瓶、そのほか多くの器具に作られ、広い用途を持つ。古くは、これでできたものをガラスと呼んだこともあった。(小学館『国語大辞典』電子版)

(14)

No	主題	文
11	ガラスは、	かたく、もろく、透明な物質で、
12	=	通常、珪砂や石灰などを混ぜて高温で溶かし、急冷して製したもの
21	色ガラスは、	金属の酸化物を混ぜて製する。
22	=	酸化コバルト、酸化マンガン、酸化第一第二銅などを用いる。
13	(ガラスは)	食器、瓶、そのほか多くの器具に作られ、
14	=	広い用途を持つ。
15	=	古くは、これでできたものをガラスと呼んだこともあった。

この文章では、まず「ガラス」という主題がたてられ、その主題フォルダに「文 11」と「文 12」がおかれる。つぎに「色ガラス」という名詞句に「は」がくわえられてあらたな主題となり、このフォルダに「文 21」と「文 22」がおかれる。問題はつぎの文である。番号「13」をあたえた「食器、瓶、そのほか多くの器具に作られ」という文は、それ自体に主題となる「は」でマークされた名詞句がない。その場合、順列的な構造だけでかんがえると、まえの主題である「色ガラス」の主題フォルダがまだアクティブであることになるが、この文が「色ガラス」だけにたいする記述であるとはかんがえにくい。さらにそのあとの「文 14」と「文 15」も同様に、「色ガラス」フォルダに収納されているとはかんがえにくい。

それよりは、「色ガラス」にかんする記述は、「ガラス」全体への記述の途中にはさまれた補足説明のようなものであって、「食器、瓶、そのほか多くの器具に作られ」以下は、やはり「ガラス」にたいする説明であるにとらえるほうが、文全体からみて安定的である。そうであるとする、と、「色ガラスは、金属の酸化物を混ぜて製する。酸化コバルト、酸化マンガン、酸化第一第二銅などを用いる。」という 1 つの主題と 2 つの文は、「ガラス」というそれより大きな「主題単位」の内部に臨時的にくみこまれたものであるということになる。

このより大きな主題は、「くみこみ」という事態の質からかんがえて、くみこまれる当面の主題をふくむことのできるような上位の概念でなければならない。ここでいえば、「ガラス」が総称であり、「色ガラス」がその一部であるから、そうした条件をみたしていることになる。よってこの文章は、「ガラス」を「親主題フォルダ」とし、その内部に「色ガラス」という「子主題フォルダ」があるということになる。

この「親-子フォルダ」のはたらきかたを、本稿ではつぎのようにかんがえる。

- (15) 親主題フォルダは、子主題フォルダが出現したのちも、その「子主題フォルダ」に収納されえない文がのべられた時点で、自動的にアクティブとなり、あらためて主題をたてることなく、必要な文をその内部におさめることができる。

このために、さきほどの「ガラスー色ガラス」の文章で、「色ガラス」についての記述が終了したにもかかわらず、もういちど「ガラス」という主題をたてることなく、「親主題」である「ガラス」についての記述をおこなえるのである。これが主題フォルダの階層構造である。例をもう1つあげる。

- (16) 高速増殖炉懇談会は、高速増殖炉開発のあり方についての報告書案を審議し、考え方の大筋で合意した。案は、増殖炉を有力な選択肢と位置付け、研究開発を続けるべきだとしたが、安全性や経済性の確保に厳しい条件をつけた。そして、「実用化が不可能なら他の手段で」と提言し、実用化について「柔軟に見直す」と明記しており、高速増殖炉を柱に据えてきた政策の大きな転換となる。今後、座長が改めて案をまとめ、11月末にも最終報告書を提出する予定だ。
(Mainichi News Daily 記事(一部改))

(17)

No	主題	文
11	高速増殖炉懇談会は、	高速増殖炉開発のあり方についての報告書案を審議し、
12	=	考え方の大筋で合意した。
21	案は、	増殖炉を有力な選択肢と位置付け、
22	=	研究開発を続けるべきだとしたが、
23	=	安全性や経済性の確保に厳しい条件をつけた。
24	=	そして、「実用化が不可能なら他の手段で」と提言し、
25	=	実用化について「柔軟に見直す」と明記しており、
26	=	高速増殖炉を柱に据えてきた政策の大きな転換となる。
13	(高速増殖炉懇談会は)	今後、座長が改めて案をまとめ、
14	=	11月末にも最終報告書を提出する予定だ。

この文章では、「高速増殖炉懇談会」が親主題フォルダを、「案」がその内部の子主題フォルダをつくっている。これは「懇談会」が作成した「案」という事実にもとづいた上位下位関係である。その子主題フォルダの「案」には、「文21」の「増殖炉を有力な～」以下、「文26」の「高速増殖炉を柱に据えて～」までの6つの文が収納されており、そのあとの「文13」の「今後、座長が改めて案をまとめ、」以下の最後の2文は、ま

た親主題フォルダにおさめられている。そこに、あらためて「高速増殖炉懇談会」という主題がたてられていないにもかかわらず、この「文 13」以下が親主題フォルダにもどっておさめられるのは、これら 2 つの文が子主題フォルダには収納できないからである。それは、「文 13」の述語の項として「案」がヲ格名詞句となってあらわれていることで、明示的になる。基本的に主題がもういちど何らかの格をもつ名詞句として出現することはゆるされないはずだからである。よって、すでに「懇談会」が親主題フォルダをつくっているのです、これらの 2 文はそこに収納される。

6. 「主題フォルダ」の例外

前項まで、主題フォルダという仮説をたてることで、文章の構造がどのように理解できるかという問題を、実例によってみてきたが、単文にきりわけて、順列的なおよび階層的な構造をもつ主題フォルダに整理するという方法では、主題フォルダに収納しきれない文が存在する。本稿では、いまのところ、そうした例外を以下の 4 種類にまとめることができるとかんがえる⁵⁾。

- (18) a 連体節は、それだけを独立させて主題フォルダに入れることはできず、主題単位の外部にあるものとみなす。
- b 副詞節は、通常主題フォルダによる処理のほかに、主題フォルダにいれずに主題単位の外部にあるものとみなすことも可能であるとする。
- c モダリティをもつばらになうための文は、主題フォルダにいれずに主題単位の外部にあるものとみなす。もしその文に「は」でマークされた文頭名詞句があれば、それは主題列からはずす。
- d 文頭以外におかれる対比の「は」や否定のフォーカスをしめす「は」でマークされる名詞句は、主題とみなさず、主題列にいれない。

連体節については、内部に「は」主題がたたないことなどが指摘されているが、本稿では、連体節は、ある主題に後続していても、それだけ

を独立させて主題フォルダにいれるという処理はされていないとする。たとえば、以下の例で、「荒川区」を主題とするフォルダに4つの文が収納されているが、3つめの「(荒川区は,) 協定を結んだ自治会もある」という文の「協定」にくわえられている「バールなど工具をガソリンスタンドから借りる」という連体節は、他の4つの文と同レベルで「荒川区」主題フォルダにいれることはむずかしい。

- (19) 荒川区は、自治会が自費でチェーンソーなどをそろえ、レスキュー隊を作った。バールなど工具をガソリンスタンドから借りる協定を結んだ自治会もある。地域の企業との協定も多い。(朝日新聞記事)

この「バールなど工具をガソリンスタンドから借りる」という連体節に、主題である「荒川区」をいれこんで文とする場合、「荒川区は、自治会がバールなど工具をガソリンスタンドから借りる」というように、3つめの文から「自治会」をとりだし、適当な格形式にして挿入するという単純ではない操作が必要になる。もし、単純に主題だけをたててみると、「荒川区は、バールなど工具をガソリンスタンドから借りる」という文になり、これでは「荒川区(役所)」が「工具を借りる」という行為の動作主となるという解釈のほうが優先的になるが、意味的にもとの文とはことなるものになる。

よって本稿は、連体節を主題単位からはずしてかんがえることを主張する。

つぎに副詞節である。これについても、基本的には連体節と同様に、たとえある主題に後続していても、その主題フォルダにいれないという処理が可能であるとする。以下の例である。

- (20) 理由は、先行商品の成功が挙げられるが、それだけではない。若者中心に受け入れられるとみるや、相次いで思い切った設備投資に打って出るタイミングのよさもある。(週刊ポスト記事)

この文章では「(ある企業の成功の)理由」が主題となってフォルダを形成しており、「先行商品の成功が挙げられる」と「それだけではない」と「相次いで思い切った設備投資に打って出るタイミングのよさもある」

の3文は、「理由」を主題として共有している。しかし、3つめの文である「若者中心に受け入れられるとみるや」は、「理由は、若者中心に受け入れられるとみる」という文が不安定な解釈しかもてないように、「理由」主題フォルダに収納できない。つまり、「理由」主題フォルダに収納される他の3つの文とは、異なる処理が必要となることになる。

よって本稿では、こうした副詞節も、主題単位からはずしてかんがえることを主張する。ただし、連体節と違って、副詞節について「主題単位の外部にあるものとみなすことも可能であるとする」としたのは、つねに主題フォルダに収納できないのか、あるいは適当な主題フォルダにはいる場合もあって、そのときには主題フォルダで処理されるのかについて、いまのところ未解決だからである。おそらく厳密には、前の連体節についても同様のことがいえるのかもしれないが、当面、連体節については、主題単位からすべてはずして処理するとみなし、副詞節については、そうでない可能性をのこしてしているとみなしておく。

つぎは、モダリティの機能をはたす文である。たとえば、以下の文章の第4文後におかれている「僕の知る限り」は、そのうしろの「長いあいだ壁の隅のほうに掛かっているけれど、父は一度もそれを弾いたことがないし、触ろうともしない」という文にたいする「つよい確信および断定」といったモダリティをしめすものである。

(21) 父の書齋に奇妙なものがひとつある。それはロシアの木製のバラライカだ。もうぼろぼろで、三本の弦のうち二本が切れている。僕の知る限り、長いあいだ壁の隅のほうに掛かっているけれど、父は一度もそれを弾いたことがないし、触ろうともしない。(巴金「バラライカの思い出」山口守訳)

この文章全体は、第1文が主題をもたず、第2文以後が「それ(＝バラライカ)は」という主題フォルダにすべて収納されている。ただし、「僕の知る限り」だけは、「バラライカ」という主題フォルダに収納しにくい。これを前の副詞節の問題として処理することも可能であるが、この「僕の知る限り」は、「僕は知っている」といいかえることも可能であり、その点で副詞節とはやや異なる。「僕は知っている」は、述語の活用形や接続詞などといった接続要素で後続の文とつながっているのではな

く、それ自体「僕は」という主題をもつ文である。しかしこうした主題は、当該の文章が形成している主題列とはレベルがことになっており、モダリティとしての話者主観を表出するための1人称が主題となっている。

こうしたもっぱらモダリティの表現だけを目的として、命題部分をもたない文は、そのモダリティの本質上、1人称相当語句が主題となる。この主題は、命題レベルで形成される主題列とは、基本的にレベルがこととなる。よってこうしたモダリティにかかわる主題は、主題列からはずされなければならない、そうした文も主題単位の外部におかれなければならない。

最後の問題は、談話単位の冒頭におかれたのではない名詞句で、かつ「は」でマークされるものの問題である。以下のような「は」である。

- (22) a この大学のキャンパスはひろいが、設備はまだ十分でない。
b こういった種類の漫画はよまない。

それぞれ、a はいわゆる対比の「は」、b は否定や疑問の焦点をしめす「は」である。これらの「は」と、本稿でとりあげている文頭にある主題の「は」は、本来はおなじもので、格関係をしめすのではない名詞句にたいし、情報のうえでとりたてるという機能があったものとかんがえる。「対比」と「焦点」はその直接的なあらわれである。

しかし、本稿では、これらを主題の「は」と区別してかんがえる。それは、位置の問題である。Tsao (1979) が指摘する中国語における主題の特性も、第一に文頭位置にあるということであり、そうした他言語との共通性をかんがえるためには、主題名詞句の位置を拡大させないほうがその性格を明確にできるとかんがえる⁶⁾。またさらに、ここにあげた文頭位置以外の「は」は、文頭におかれる主題の「は」と、以下のように共起しうる。

- (23) a この大学は、キャンパスはひろいが、設備はまだ十分でない。
b ああいうひとは、こういった種類の漫画はよまない。

こうした理由で、本稿では、こうした「は」と、主題フォルダを形成して主題列の一部となる「は」とを区別し、それらを主題とあつかわない⁷⁾。

7. 主題化の可能性

以上みてきたように、主題は、談話参加者がある適当な名詞句に主題マーカーをあたえて、談話単位の冒頭におくことでつくられるとかがえることができる。この場合、無制限な名詞句が主題の候補としてあるのではなく、談話参加者が有限個数の主題化可能な名詞句のリストをもっているとかんがえたほうが、コミュニケーションの円滑さを説明しやすい⁸⁾。つまり、話者だけでなく、聴者も主題化可能な名詞句リストを共有し、主題列と主題フォルダの形成を予測しながら談話がすすめられているので、より効率的なコミュニケーションができるというかんがえかたである。本稿では、このリストに、以下のような名詞句が主題候補として掲載されているとかんがえる。

- (24) a 談話全体の話題をしめす名詞句
 b 「わたし」「ここ」など現場指示で1義的にきまる名詞句
 c 「空主題文」で導入されたあたらしい名詞句
 d すでに主題となった名詞句、およびそこから連想される名詞句

そして本稿は、これらの名詞句のうち、どれに「は」を付与するかについて、談話がどういう主題列をつくりながら推移していくかにかんする話者の把握と予測にもとづいてきめられると主張する。話者が、現在の談話単位をつくっている主題は「A」であり、ここからつぎの「B」に主題を移行させようと意図すれば、その「B」に「は」がマークされるのであり、もし主題は「A」のままで、「B」について言及しようと意図すれば、その「B」は適当な格助詞などのままにおかれる⁹⁾。

よって、何が主題化されるかという問題は、コミュニケーションのながれにもとづいて形成される適当な主題列があり、それにあわない主題は、その主題列のながれから拒否される、という問題としてかんがえることができる。

- (25) a ねえ、知っている？ 大学前のバス停のところ。トラックは事故をおこしたんだって、今朝。
 b ねえ、知っている？ 大学前のバス停のところ。あたらしいビルができるんだって。そのビルは、レストランやショップがか

なりはいるらしいよ。にぎやかになりそうだね。

これらの例では、a b ともに、「大学前のバス停のところ」が主題の導入とみなされる。よって聴者は、それを主題フォルダとして形成し、そこに収納できるような文を期待する。しかし a 例では、導入されたはずの「バス停のところ」という主題ではない別の主題である「トラック」が提示される。「バス停のところ—トラック」は、この場合、主題列を形成しない。主題列は、有意味に関連した順列をつくらなければならないからである。いっぽう b 例は、「バス停のところ—ビル—バス停のところ」という主題列を形成しており、この主題列は有意味に関連している。「ビル」が、第 1 文で「バス停のところ—ビル」として記述されているからである。さらにこの例では、「バス停のところ」と「ビル」が、空間の占拠という側面で上位下位関係をつくっており、「バス停のところ」が親主題フォルダ、「ビル」がその中にある子主題フォルダとしてはたらいている。

このように、何が主題として「は」でマークされて文頭におかれるかは、それが主題列として有意味な順列を形成できるかどうかによってきまる。

8. おわりに

本稿は、ここで議論する談話単位の構造が、文章全体に規則として強制的に存在することを主張するものではない。談話の構造は、その本来的な性質上、傾向性として存在する。よって本稿で議論する談話の構造を制御する規則からの逸脱は、不適格な文または文章をつくるものではない。

たとえ主題フォルダがうまくつくられず、主題列がきちんと形成されなかったとしても、ややわかりにくい文章となるか、あるいはあいまいな文章ができるだけである場合がおおい。それだけでなく、文章にかんする「リズム」や「うつくしさ」といったさらに上位の要求によって、わざと主題フォルダの形成がおこなわれなかったり、主題列が形成されなかったりすることもある。

それでもなお、本稿は、ここで検討した主題フォルダと主題列の構造が「は」の機能として存在するとかんがえる。この項では、その間接的

な例証として、接続詞をみてみたい。接続詞を、本稿でみた主題列とかかわって、主題フォルダ内部におかれるものと外部におかれるものに分けるといふかんがえかたである¹⁰⁾。

- (26) a 主題フォルダ外部の接続詞の例：さて・しかしながら・したがって・それに
 b 主題フォルダ内部の接続詞の例：あるいは・かえって・かといって・そして

前者の接続詞は、主題フォルダ外部におかれるので、ある主題単位と別の主題単位をつなぐことになる。いっぽう後者の接続詞は、主題フォルダ内部におかれるので、主題単位とはかかわらず、同一主題フォルダ内部で、2つの文をつなぐことになる。たとえば、意味のうえで比較的にかい「そして・それに」が主題フォルダの内部にあるか外部にあるかを調査した数値は、以下のようになる¹¹⁾。この数値は、接続詞の「そして・それに」と主題フォルダの「外部・内部」の相関が、1%基準でみとめられることをしめしている。

(27)

	主題フォルダ内部	主題フォルダ外部
そして	15	4
それに	2	10

具体的に例をみる。以下の a が主題フォルダ外部になる「それに」の例、b が主題フォルダ内部になる「そして」の例である。

- (28) a 会社は、ボランティアじゃないんだから、このあいだまで学生だった人間に利益を追求させることなんてできますか。それに、新人は、本格的な仕事のやりかたをおぼえる以前に、社会人としてのルールやマナーや社内独自のとりきめとかおぼえることがたくさんあるはずですよ。
 b 大阪弁は、はなすにはいいけど、かきにくい。とくに変換しにくい。そして、文字にすると、微妙にニュアンスがかわってつたわりにくい。

a では、まず「会社」が主題フォルダをつくって、2つの文を収納する。つぎに「それに」という接続詞を介して、「新人」というあらたな主題フォルダがつけられる。つまり接続詞「それに」の前後で主題フォルダがことなっているのである。これにたいし b では、「大阪弁」という主題フォルダがつけられ、そこに4つの文が収納されているが、その第3文と第4文のあいだに「そして」という接続詞がおかれており、接続詞の前後で主題フォルダがかわっていない。

このことは逆に、もし「それに」のような主題フォルダ外部の接続詞があれば、その前後で主題フォルダが変更される可能性がたかいことを意味する。つまり、主題フォルダ外部の接続詞は、そのまえまではたっていた主題フォルダがとじられて別の主題フォルダがひらかれるはず、あるいは、もしあたらしい別の主題が提示されなければ、親主題フォルダなどがひらかれるはず、というサインとして理解されることになる。

以下の例は、接続詞「したがって」にかんするものである。「したがって」は、通常、a 例のように、主題フォルダ外部におかれ、その前後で主題を変更する。これにたいして b 例は、「したがって」の後に新しい主題がたてられていないものである。

- (29) a 国連開発計画は、白書において、3つの指標から成る人間開発指標 (HDI) を作成している。その中で、HDIによって世界各国の順位づけを行い、GNPの順位とHDIの順位が大きく異なることを示している。したがって、経済発展の評価は、「経済成長率」以外の様々な指標を組み合わせたものでなくてはならないと考えられよう。(伊藤真二「返還直前にみる香港の将来」『さくら総研レポート97年上半期』)
- b 米軍のチョコレートは、なかなかおいそれと手にはいらず、値段は高く…(中略)。なにしろ米軍は、つかまるほうも、つかまえるほうもおそろしくでかい。そしてちっちゃな日本人でも、ごっつい米兵なみに手荒くあつかうから、つかまるとおっかない。したがって自分で直接GIから買うのはヤバくて、しかるべきルートをもっているバイニンの手をへるよりしかたがないので、イライラはつる。(小松左京『やぶれかぶれ青春記』)

この b 例の文章の「中略」以後をみると、「米軍」という主題フォルダに 3 つの文がおかれ、つぎに「したがって」という接続詞がある。この接続詞によって、まえの主題である「米軍」がキャンセルされるはずである。たしかにこの接続詞直後の文に、そのまえまでの主題を適用して、「米軍は、自分で直接 GI から買うのはヤバイ」という文をつくっても、ここでは意味的に成立しない。よって別の主題がたてられるとかがえられるが、実際には別の主題は明示されないで、親主題など潜在的に主題フォルダを形成しうるものをさがすことになる。この文章の場合、「中略」以前のところにある、「米軍のチョコレート」が、文章全体の話題となっている親主題とかがえられる。明示的な主題がなく、かつ空主題としても処理できない場合の優先権を親主題にあたえておけば、ここではそれが主題としてはたらくことになる。つまり、「米軍チョコレート」という親主題フォルダに「自分で直接 GI から買うのはヤバイ」以下の文が収納される。

前述したように、本稿で論じた主題フォルダと主題列は、義務的な規則ではないので、つねにあきらかに存在するわけではない、しかし、うえでみたような接続詞のふるまいは、「は」による主題フォルダと主題列の存在を間接的にしめすものであるとかがえる。

* この論文は、神奈川大学共同研究奨励助成金（2000-2001 年）による研究成果の一部である

注

- 1) Tsao (1979) を参照。とくに主題のもつ結束性が談話上の単位をつくるという本稿の主張の基本は、Tsao のこの著書で提示されたものである。
- 2) 結束性と主題の問題にかんしては、亀山 (1999) を参照。
- 3) 三上 (1960) で、「ピリオド越え」として提示されて以来、さまざまにとりあげられた「は」の特徴である。
- 4) 認知心理学によるよみとり理解の研究では、ここにしめすような「主題フォルダ」の形式を機械的に完成させるだけでは、かならずしも容易な理解にむすびつくわけではないことが報告されている。石田 (1999) などを参照。
- 5) このほか、「去年は」や「当地では」といった時間と場所の名詞句が文頭にあって「は」でマークされているものについても、主題列を形成しないものがあるように思われるが、未解決である。

- 6) 龍城 (2000) や胡 (1993) では、文頭で「は」によってマークされている名詞句以外をテーマとしてあつかうことが論じられているが、本稿では、当面、文頭の名詞句に限定して議論をすすめる。
- 7) このほかに、「いろいろと苦勞してきたということは、わかってもらいたい」のような、「こと」による名詞化句に「は」がくわわったものの問題があるが、これについてはあらためて検討したい。
- 8) Bekeš (1995) が、ある名詞句が主題となりうるための必要十分条件を、トピック比、指示距離、持続性の 3 つの数値的パラメタから決定するところみをおこなっている。
- 9) その意味で、本稿も、「が」か「は」かという問題はなりたたないとかんがえる。これが問題となるように見えるのは、主題が文頭名詞句であり、「ガ格」名詞句が語順のうえで最初にきやすいという位置にかんするふるまいが、この 2 つの助詞でかさなるからであるにすぎない。なお、「が」と「は」を対立的にあつかう問題設定がなりたたないことにかんしては、柴谷 (1990) を参照。
- 10) このアイデア自体は、Illinois University の鄭錦全教授が 1997 年に神奈川大学でおこなった講演において、中国語の *discourse analysis* の一例として提示されたものである。
- 11) 小説 (赤川次郎『女社長に乾杯』田中雅美『雪月花殺人事件』)、インターネット雑誌の読者投稿欄、新聞 (『毎日新聞 95 年度版』社会面記事)、論文 (『さくら総研レポート 97 年度上半期』) からとったそれぞれ約 10 万字、計 40 万字によるデータである。

参考文献

- Tsao Feng Fu (曹逢甫) 1979 『A functional study of topic in Chinese: the first step toward discourse analysis』. 学生書局 (台北)
- Bekeš, Andrej. 1995 「文脈から見た主題化と『ハ』」 (益岡隆志ほか編『日本語の主題と取り立て』. くろしお出版)
- 石田潤 1999 『文の読みやすさと文表現形式との関係』神戸商科大学経済研究所
- 亀山恵 1999 「談話分析：整合性と結束性」 (大津由紀雄ほか編『岩波講座言語の科学 7 談話と文脈』. 岩波書店)
- 柴谷方良 1990 「助詞の意味と機能について」 (国広哲弥教授還暦退官記念論文集 編集委員会編『文法と意味の間』. くろしお出版)
- 龍城正明 2000 「テーマ・レーマの解釈とスープラテーマ」 (小泉保編『言語研究における機能主義』. くろしお出版)
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』. くろしお出版
- 三上章 1960 『象は鼻が長い』. くろしお出版
- 胡壮麟 1993 「有关日语主语的若干问题」 (朱永生主编『语言·语篇·语境』清华大学出版社 (北京))